レポート 【未来を創造する】～2020 年から未来へ、文化で繋ぐ～

© British Council Photo by Kenichi Aikawa

2020 年、東京・日本

2020 年の五輪大会の東京開催が決まり、6 年後の大舞台に向けた期待感と、これを契機に東京だけでなく日本全体を盛り上げようとする機運が高まっています。五輪開催は文化セクターにとってどんな可能性を意味するのでしょうか? また、文化セクターの役割と社会にもたらす価値は何でしょうか? より多くのステークホルダーと一緒に考え、未来へのビジョンを描くため、ブリティッシュ・カウンシルとアーツカウンシル東京（公益財団法人 東京都歴史文化財団）の主催でフューチャーセッション形式のワークショップを開催しました。株式会社フューチャーセッションズ、代表取締役社長の野村恭彦氏のファシリテーションのもと、東京丸の内にあるエコッツエリア協会の 3x3 Labo（さんさんらぼ）で 2014 年 2 月 14 日に行いました。

100 年に一度の大雪の中、アーティスト、デザイナー、美術館のキュレーターやエデュケーター、演劇プロデューサー、劇場やホール、音楽団体等のアートマネジャー、アートNPO 関係者、民間企業、行政、メディア関係者など、セクター、分野を超えて約 40 名の方にご参加いただきました。

ワークショップ

はじめに、ブリティッシュ・カウンシルから今回のワークショップを開催するにあたっての『想い』の共有がありました。

—— 2012 年のロンドン五輪の際には「カルチュラル・オリンピアード」と題した大規模な文化プログラムが英国全土で展開されました。様々な成果、インパクトを残したこの経験を日本の文化関係者と共有し、2020 年の文化プログラムとその先の文化セクターの未来へのビジョンを、既存の枠組みを超えて多くのステークホルダーと一緒に創造していきたいと願っています。 ——

続いて会場の 3x3 Labo の紹介と、多様なステークホルダーが既存の枠組みを超えて集まり、オープンな対話を通して新しい形で関係性の構築や未来の価値を生み出す場を目指す「フューチャーセンター」について簡単な説明がありました。

2014 年 2 月 14 日 開催

◆ セッションのプロセス ◆

オープニング
インスピレーショントーク
シェア
フィッシュボウル
マグネットテーブル
チェックアウト
クロージング

『チェンジ・コンセプトの創造』

2020 年とその先の未来に向かって共通のビジョンを描き、実現するためには、「文化セクターのフレームワークを変える『チェンジ・コンセプト』の創造」が必要なのではないか? ファシリテーターの野村氏の、問いかけでワークショップがスタートしました。

© British Council Photo by Kenichi Aikawa

インスピレーショントーク

五輪を開催することは文化セクターにどのようなチャンスをもたらすのか? 2012 年のカルチュラル・オリンピアードの実行において中心的な役割を果たした二人のゲストスピーカーのトークをインスピレーションに考えました。

◆ 3x3 Labo ◆

大丸有（大手町・丸の内・有楽町）エリアの持続可能なまちづくりを推進するエコッツェリア協会が、サステナビリティの 3 要素「経済・社会・環境」が交ざりあう、会社でも自宅でもない「3rd プレイス」として、業界や業種の垣根を越えた交流・活動拠点の場として期間限定で運営
http://www.ecozzeria.jp/fujibldg33/

モイラ・シンクレア
アーツ・カウンシル・イングランド
エグゼクティブ・ディレクター（ロンドンおよび南東地域担当）

—— ロンドンでの五輪開催が決まり、カルチュラル・オリンピアードプログラムの計画を始めた時、アーツ・カウンシルが望む成果として、3 つのことをあげました。

- できる限り多くの人（特に若い人）が文化芸術活動に触れる機会をつくること。
- アーティストの認知度や評価を上げる機会を最大限活かし、特に文化芸術活動やアーティストが創造する『社会的価値』について認知・理解を広める。
- 英国内は勿論のこと、海外も含めてクリエイティブセクター内の関係性を強め、パートナーシップやコラボレーションの促進と、新しい協働のあり方をみつける。

Sue Austin《Creating the Spectacle!》(2012)

© Mayor of London

Le Studio de Cirque《Piccadilly Circus Circus》(2012)

© Mayor of London

目標を設定した上で、次に何がしたいのかを考えました。一番初めに決めたのは、ロンドンだけでなく、英国全土で文化プロジェクトを展開すること。そして、英国の人と文化の多様性を象徴し、その多様性を英国内だけでなく世界に向けて発信し称えるプログラムを作ることでした。

普段アートに触れる機会の少ない人に体験・参加して欲しかったので、無料のプログラムや会場も街中、教会やアイコニックな建造物、世界遺産など、普段はできない、ちょっと変わった場所を選び、多くの人が美術館に出向かなくてもアートに触れる機会をつくりました。これはアーティストにとってもアート、そして空間を捉えなおす貴重な機会でした。

五輪開催は決してスポーツだけの舞台ではなく、文化セクターにとっても本当に大きなチャンスです。ロンドンへは大会前から全世界のメディアが多数訪れ、皆記事になるストーリーを探していました。私たちは彼らに英国の文化の豊かさをアピールしました。また、障害を持ったアーティストの作品を大々的に紹介し、世間の見方、固定観念、先入観、偏見を大きく変えるチャンスにしました。

これから 6 年間、皆さんに考えていただきたいのは、『東京』・『日本』から世界に伝えたいメッセージは何なのかということ。そして『レガシー』として残したいものを考えること。これは無形のものと、2020 年の大会後も『形』として残り生き続けるもの。ロンドンでは『五輪公園』の形で残しました。

“東京、日本が世界に発するメッセージは?”

2020 年、素晴らしい文化プログラムと、東京・日本からのメッセージを楽しみにしています! ——

© British Council Photo by Kenichi Aikawa

ルース・マッケンジー
ロンドン 2012 カルチュラル・オリンピアード　ディレクター
ロンドン 2012 フェスティバル　キュレーター

―― 皆さん、五輪公園のタワーをご存知ですね? あれはアニッシュ・カプーアに、「今までで一番大きくて、無謀なくらいにすごい、最高にワイルドな作品」を創造して欲しいと依頼して生まれた作品です。ロンドンのカルチュラル・オリンピアードと、その後のロンドン 2012 フェスティバルで数々の素晴らしいプロジェクトが実現したのは、たくさんのアーティストの『夢』があったからです。

私たちはアーティストに五輪の開催というのは『一生に一度のチャンス』、だから『一生に一度の作品』をつくって欲しい、何でもできるとしたら何がしたい? と聞き、この機会を逃したら二度とできないかもしれないことに挑戦しました。

“a once in a lifetime work”

例えば、シュトックハウゼンのオペラ《光》から、上演は極めて不可能に近いとされていた《水曜日》の上演を実現しました。エリザベス・ストレブのダンスカンパニーはロンドンのアイコニックな建造物のための振り付けをしたい と言ったことにはじまり、《One Extra Ordinary Day》が生まれました。ジェラミー・デラーは古代遺跡のストーンヘンジを、原寸大で、空気で膨らませるゴム遊具として作りたいと言いました。この作品《Sacrilage》は英国各地を回った後、現在は海外を巡回しています。

『夢』のあるプログラムであると同時に、できる限り英国の人と文化の多様性を反映するものを目指しし、様々なアートのスタイル、駆け出しから大御所の、年齢、性別、背景も違う、多様なアーティストに作品を依頼しました。また、カルチュラル・オリンピアードには競技大会の方には参加していない国のアーティストも参加しました。

◆ 実績とインパクト ◆
ーカルチュラル・オリンピアードと
ロンドン 2012 フェスティバルー

- 五輪開催 4 年前の 2008 年から展開
- 約 18 万の様々な文化イベントを開催
- 延べ 4300 万人の人々が参加
- 数々の文化・芸術機関や地域が様々な枠を超えて取り組み、文化セクター全体の活性化だけでなく、観光や地域振興の面でも大きな波及効果を生んだ
- 多くの市民が新しい形で文化活動に触れ、参加する機会となった

Jeremy Deller《Sacrilage》(2012)

© Mayor of London

大きな夢を実現するためには大きな予算も必要ですが、これもクリエイティブに調達しました。交通要所のロンドン、ピカデリー・サーカス交差点を 1945 年以来初めて遮断して開いた《Piccadilly Circus Circus》には、ロンドン市の文化・芸術予算ではなく、観光振興の予算が使われました。その日の写真や映像は主要メディアだけでなく、個人の SNS ネットワークを介して全世界に発信されましたので、ロンドンを宣伝する費用対効果は抜群だったと言えます。

五輪開催は、普通では考えられないことを実現する大きなチャンスです。夢を抱けばお金はどこかから出てきます。まずはアーティストの夢を聞くことから始めてみてはどうでしょうか。ロンドンは 2 年でこれだけのプログラムを造ることができました。東京での五輪開催まではまだ 6 年あります。どんな素晴らしい文化プログラムが生まれるか、とても楽しみにしています! ――

シェア

トークを聞いての気づきや印象に残ったことを参加者同士で共有しました。ファシリテーターの野村氏はトークの中の『大きな夢を描く』ことと『何を伝えたいのか考える』ことが「文化セクターのフレームワークを変える『チェンジ・コンセプト』の創造」に必要なのではないかと問いかけました。

© British Council Photo by Kenichi Aikawa

フィッシュボウル

フィッシュボウルは、全員参加型の対話の手法です。互いの話を聞きながら自由に発言し、気づきを共有することで、より多くのアイディアや発見が生み出されることを促します。参加者同士のシェアでどんなことが話されたかを共有しながら、ゲストスピーカーにもインプットしていただきました。

参加者

- シェアでは「何ができるか?」よりも現場の懸念の話が多くなってしまった。
- 英国はビジョンやクリエイティビティが豊かな国ということを発信しているが、日本のアイデンティティは?
- 文化プログラムについては、文化の担い手である自分たちが意見を出していくべきではないか。

© British Council Photo by Kenichi Aikawa

- 行政に任せるのではなく、文化セクターがリーダーショップを発揮するべき。
- 日本でどのように大きな動き、協働の体制を作れるか?
- 2020 年には、スポーツだけでなく「文化」の面もあるということをもっと世の中に発信する。
- 『一世一代』と言われると燃えるものがある。
- 東京にはプロのオーケストラが 10 団体もあるのだから、もっと発信力を高めるべきだ。

© British Council Photo by Kenichi Aikawa

“something bigger than the sum of the parts”

ゲストスピーカー

- 10 ものオーケストラがあるのは素晴らしい財産です。それぞれで何かをやろうとするよりも、皆で協働する方がより大きなインパクトを生むことができます。
- 五輪招致が決まってすぐの頃は多様な声を集めるためにアーツ・カウンシルはとにかくたくさんのステークホルダーと話した。期待感は上がったものの、何がしたいのか、方向性を少し見失ってしまった。そんな時は文化・芸術のリーダーとして自分たちの役割は何なのかしっかり考え直すことが必要。
- 一つの強いビジョンを持つリーダー、信頼して皆の夢と期待を任せられるリーダーを見つけることはとても重要。
- ロンドンではカルチュラル・オリンピアード・ボードが設置され、ロンドン市、アーツ・カウンシルをはじめ、英国の文化セクターが信頼できる代表から構成されていた。だからその理事会が選出したリーダー(ディレクター)に安心して自分たちの思いを尽くすことができた。
- 今の段階ではまず、文化セクターに精通した人の中から 2020 年の文化プログラムを牽引するリーダーを選出して欲しいという声を上げ始めること、そして『夢』を持ち始めることができる。

“『一世一代』と言われると燃えるものがある”

- 五輪の正式放送局が決まれば、文化プログラムについてその局と話す機会ができる。ロンドンの時は月に一度 BBC（英国放送協会）と会議できる、文化セクターにとってまたとないチャンスができた。BBC は文化・芸術にあまり関心を持っていない印象があったが、今までにない規模で文化プログラムについて報道がされた。

マグネットテーブル＆グループワーク

インスピレーショントーク、フィッシュボウルの対話を通して、2020 年の五連開催は日本の文化セクターにとって、未来に向かってチェンジを起こし、夢を実現するための「またとないチャンス」であることが見えてきました。
ここでは参加者が「自分」の、あるいは「日本の」の文化セクターの未来に向けた『夢』を書き、それを掲げながら会場を歩き回り「この人と一緒に夢を語りたい」と思う 4、5 人のグループを作って互いに『夢』を語り合いました。

© British Council Photo by Kenichi Aikawa

© British Council Photo by Kenichi Aikawa

◆ モイラ・シンクレア ◆

アーツ・カウンシル・イングランド
エグゼクティブ・ディレクター
（ロンドンおよび南東地域担当）

ロンドンおよび南東地域でアーツ・カウンシル・イングランドから助成を受ける 322 のアート団体の活動や運営状況などを統括。また、アーツ・カウンシル・イングランドのボード・メンバーとしてイングランド全体の政策策定に携わり、特に文化セクターの成長と人材育成を担当。2012 年のロンドン・オリンピック・パラリンピック競技大会に大きく貢献し、現在もその成果を今後につなげていくレガシー・プログラムを担当。

◆ ルース・マッケンジー ◆

ロンドン 2012 カルチュラル・オリンピアード　ディレクター
ロンドン 2012 フェスティバル　キュレーター
ディジグネート・オランダ・フェスティバル　芸術監督
ザ・スペース　ディレクター

ロンドン 2012 カルチュラル・オリンピアード ディレクターおよびロンドン 2012 フェスティバル キュレーター、25,000 人のアーティスト、2,000 万人以上の観客が参加した英国史上最大規模のアートフェスティバルを成功に導く。現在アムステルダムの国際的に著名な芸術祭「ディジグネート・オランダ・フェスティバル」の芸術監督を務める他、英国 BBC とアーツ・カウンシルによる新しいオンライン上のアートプラットフォーム「ザ・スペース」のディレクターも兼任。

チェックアウト

最後に大きなハート型の円を作り、参加者全員で一人ひとりの 2020 年とその先の未来に向けた夢や大望、期待を共有しました。

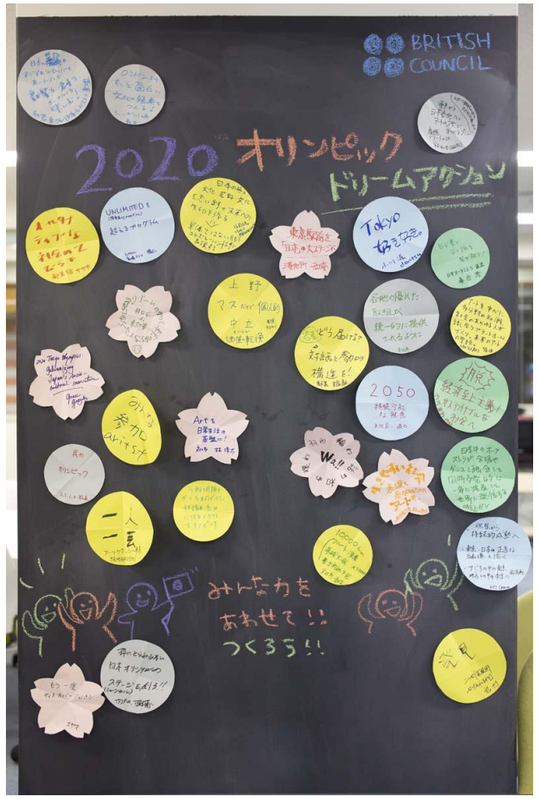
野村氏が「今後も一緒に夢を膨らませ、実現のための協働活動を続けたい、そのための場を自ら作りたいと思う人」と聞くと、たくさんの手が上がりました。

クロージング

“it’s your party!!”

ワークショップを振り返り、ルース・マッケンジー氏は、参加者の熱意にわくわくしたと話し、「大きく夢を見て欲しい。英国は東京だけでなく日本全国を応援し、最高の文化の祭典の実現をサポートしていきたい」と感想を述べました。

最後にブリティシュ・カウンシルの駐日代表、ジェフ・ストリーターから感謝と振り返りの挨拶がありました。
―― 皆さんの熱意に大変刺激を受けました。英国の経験や学びの共有を今後も続け、こうした活動を通して新たなパートナーシップが生まれることを願っています。2020 年の文化プログラムが史上最高のものとなるように協力とサポートをしていきたいと思います。どんな『夢』が実現し、どんな『東京、日本』が発信されるのか、とても楽しみにしています。 ――



© British Council Photo by Kenichi Aikawa

© British Council Photo by Kenichi Aikawa

◆ 2020 年へ、東京・日本の『夢』 ◆

- 東京を大きな『舞台』と捉えて日本の伝統文化・芸術・芸能を世界に発信、日本の中での再発見の機会にもしたい。
- 他人事ではない『皆の大会』に! 文化を通して皆が関われるプログラムを作る。
- 英国での Unlimited を超えるプログラムを街づくりから関わりたい。
- 2020 年を契機に文化セクターの社会イノベーションを促進したい。
- 今日のような会を続け、ここで生まれたやる気、盛り上がりを繋げていきたい

© British Council Photo by Kenichi Aikawa